

# 学芸への愛と古代人との対話

## ——ルネサンス期における注釈について——

久保田剛史

私たちは物事を解釈するよりも、解釈を解釈することに忙しく、どんな主題に関する書物よりも、書物に関する書物のほうが多い。私たちは互いに注釈しあうことばかりしている。注釈書はあふれているのに、著者はひどく不足している。私たちの時代における主要な、最も名高い学識とは、学者を解釈できることではないか。これこそあらゆる研究に共通した、究極の目的なのではないか<sup>1)</sup>。

上記の文章は『エッセー』第三巻13章の「経験について」からの抜粋であるが、ここでモンテーニュが述べているように、注釈はルネサンス期において、最も盛んに行われた文学活動の一つである。この時代、フランスをはじめとするヨーロッパ諸国では、中世に書かれた注解が活字化されただけでなく、人文主義者たちによる新しい注解も次々と刊行され、多くの読者に親しまれた。また、注釈は時として批判や論争を学者たちの間に引き起こし、聖書注解の例にも見られるように、注釈書への反論として別の注釈書が生まれることさえあった。

注目すべきは注釈書の数だけではない。ルネサンス期の注釈は、神学や法学はもちろんのこと、古典古代の文芸、思想、科学、建築、美術といった学問分野にまで及んでおり、注解の対象となるテキストが豊富で多岐にわたっている。さらには、テキストの内容や語法に関する解説という体裁をとりながらも、注釈者によるユニークな論考や興味深い逸話も盛り込まれており、注釈がテキストに匹敵する重要な読み物とされていたことも、この時代に顕著である。それゆえ、注解はルネサンス期に比類のない変容を遂げ、まさしくジャン・セアー

ルが指摘する通り<sup>2)</sup>、ある種の文学ジャンルとして機能していたのである。

では、ルネサンス期の注釈はどのような特徴を有しているのか。また、それらの特徴があらわれた背景には、どのような要因が存在するのか。これらの問いに答えるには、注釈を単に文学の範疇だけで扱うのではなく、16世紀固有の学芸観や教育意識をふまえて考察する必要があるだろう。本稿では、人文主義者による注釈書を検証し、それらが書かれた文化的背景を明らかにすることで、ルネサンス期の注釈における特徴を論じてみたい。

### 1. 注釈の変容：中世からルネサンス期へ

ルネサンス期の注釈について考察する前に、中世における注解の手法について手短に触れておく必要があるだろう。というのも、注釈そのものはルネサンス期に特有の文学活動ではなく、中世の学校教育でも日常的に実践されていたからである。中世の文法学校は、古代ギリシャ・ローマ期における古典作品の読解法を継承しながら<sup>3)</sup>、テキストの「講読」(lectio)および「解説」(enarratio)という方法を教育課程に取り入れていたが、なかでも古典作品の読解は次の三段階を経て行われていた。すなわち、字義を確定するための「文法の解説」(littera)に始まり、「語の意味」(sensus)の解説によって文字通りの文意を理解させたうえで、テキストの底に潜む「著者の思想」(sententia)を明らかにする、という三つの過程である<sup>4)</sup>。この三段階の読解のうち、「文法の解説」と「語の意味」は簡潔な注としてテキストの余白に記されたのに対し、「著者の思想」はより詳細な注解として行間に書き入れられる傾向にあった。

中世の注釈は学校教育の影響下で発展してきた以上、それがキリスト教文化、特にスコラ学と不可分に結びついていたことは言うまでもない。もちろん、中世の知識人も文法や文学の教育課程で古代異教文明の作品を読み、多少なりとも異教的思想に親しんでいたが、ここで留意すべき点は中世の読書がアレゴリーの解釈を特徴としていることである。聖書注解が四種類の意味（歴史的、寓意的、道徳的、天上的）にもとづいて行われていたように<sup>5)</sup>、中世の知識人は、キリスト教徒以外の作品が学習の対象となる場合でも、そこに何かキリスト教的なメッセージを読み取ることを目指していた。たとえば、ウェルギリウ

スの『牧歌』第四歌では、ある男児が誕生し、彼の成長とともに平和で豊かな黄金時代が世界に訪れることが語られているが、この詩篇がキリストの誕生を予言する歌として解釈されていたことは有名である<sup>6)</sup>。同様に、ホラティウスやオウィディウスは「キリスト以前のキリスト教的道德家」として見なされていたし、アリストテレスさえもユダヤ・キリスト教の神を説明するという目的で読まれていた。要するに、中世文化において異教の作家を読むことは、彼らの作品を、キリスト教の真理を証明するために用いることにほかならない。こうした信仰理解や信仰強化の手助けとなるべく、中世の注釈は、古典作品が書かれた歴史的文脈をないがしろにし、テキストを「時代錯誤的な」意味へ導くという結果を招いたのである。

ルネサンス期の注釈は、中世同様に聖書や法律文、古典作品を扱いながらも、従来の手法とは一線を画している。新しい時代の注釈は、キリスト教的な読解方法に代わって、作品をとりまく文化・社会的背景を認識することに重点を置く。この変化の主たる理由としては文献学・歴史学的批評の影響が挙げられよう。実際、キリスト教的世界観が普遍とされていた中世文化、特にスコラ学的教育のもとでは、古典作品の個別的な価値はほとんど考慮されなかった。それに対して、ルネサンス期以降は、古代の生活や文化に関心を払うことで、テキストの本来の意味を探ろうとする動きが勢力を持ち始める。たとえば、エラスムスはロレンツォ・ヴァラの『新約聖書注解』を公刊（1505）した際、クリストファー・フィッシャーに宛てた献辞の中で、文法家ヴァラが用いた文献学的読解法を高く評価している。そして、「文法学者は自分の専門領域にとどまるべきであり、神学的な事柄にまで干渉してはならない」としてヴァラの作業を批判する神学者たちに対し、聖書解釈における古典研究の有用性を述べる。

私は、すべての学問の女王である神学が、その女中である文法学から手を差し出され、敬意をもって遇されることを恥辱に感じるとは思わない。というのも、文法学は他の学問より劣った地位に置かれているが、これより貴重な助力をもたらしてくれる学問は他にないからである。たしかに文法学は些細な事柄を取り扱っているが、それなくして誰も偉業を達成することはできない<sup>7)</sup>。

ここでエラスムスが「文法学」(grammatica)と呼んでいるものは、古典語のみに関する研究を指すのではない。それは古代人の言語や生活を含めた、古代に関する学問の集合体であり、聖書や古典作品を味わうのに必要とされる基礎的な知識を意味している<sup>8)</sup>。エラスムスによると、聖書を正しく読むには原典を正しく再現し、書かれている本文の背景を理解することが不可欠であり、そのためには、古典語や古典文化の知識が神学と対置されたり、神学から切り離されたりしてはならないのである。

総合的な知識への憧れは、他の人文主義者にも見られる。ギヨーム・ビュデは人間が真の人間となるために、人間性の完成に必要な知識を、古代ギリシャ期の教育理念である「一般基礎教養」(ἐγκύκλιος παιδεία)に着想を得た「円環的学識」(orbicularis doctrina)と呼んでいる<sup>9)</sup>。ビュデの定義によると、円環的学識とは「専門技術のあらゆる要素を包括し、あらゆる学問の原理と規則について考察する<sup>10)</sup>」学問を意味している。教育の主たる目的とは、外的世界の認識(自然学や宇宙学など)と人間の内面の探求(道徳学や文芸など)を通して人間性を養うことにある以上、本来の学問には境界が存在せず、それぞれの分野が関連しあいながら、人間に関する知識の有機体を構成している、とビュデは主張する。そして、古代ギリシャ・ローマ文明の価値を軽んじていた中世の知識人とは異なり、古代人の知恵にもとづいて人間的教養の復権を目指す同時代の学者たちを称賛したうえでの、古代文芸の復興に期待を寄せる。

世に名高き偉大なる君主 [= フランソワ 1 世] よ。古代ギリシャ人が円環的学識(eruditio circularis)と呼んだあの英知を、今日でも教訓としている人物は、[無双の怪力なる]ヘラクレスのような人々であるか、そうでなくとも[地動説を唱えた斬新な]ヘラクレイデスのような人々でありましょう。というのも、この学識は巨大な連環、つまり複数の学問が奏であう響きや合唱を包み込んでいるばかりか、急坂で乗り越えがたい曲がり道さえも含んでいるからです。たしかに、私たちの時代には、これまで以上に大きな障害が横溢しています。しかし、この時代は一連のムーサたち、つまりトーガをまとった[ローマの]詩女神やパリウムをかけた[ギリシャの]

詩女神を、広く知らしめることに積極的に取り組んで、かつては非常に有名だったのに、もはや近寄りがたく孤立化の様相を呈していた、あの山脈の彼方からムーサたちを呼び戻したのです<sup>11)</sup>。

こうした「円環的学識」の実例としては、まさしくビュデ自身による『ユスティニアヌス法典・学説彙集注解』（1508）を挙げることができるであろう。人文主義がローマ法研究の分野にも影響力を及ぼすにつれて、伝統的な法学者たちに古典に関する教養が欠如していることが明らかとなり、格調高いローマ法文の周囲に粗悪なラテン語で綴られた彼らの注解が批判の対象となったことは、アコルソの注解を「うんこでできた縁飾り」になぞらえたラブレーの例にも明らかであるが<sup>12)</sup>、『学説彙集注解』におけるビュデの目的は、まさしく中世から絶対視されていたこれらの法解釈を訂正批判することにあった。そのためにも、ビュデは、学説彙集の原典に最も近いとされる「フィレンツェ写本」を参照しながら、テキストの文献学的検討を行ない、条文の正確な意味を回復させようと試みているが<sup>13)</sup>、彼の作業は伝統的な注釈学者が行っていた法律文の分析や解釈だけにとどまることはなかった。実際、ビュデの『学説彙集注解』は、法律文の解説に端を発しながらも、古代人の文芸、諸科学、生活習慣にまで記述が及んでおり、彼の百科全書的学識を知ることができる。たとえば、「破廉恥（infamia）の汚点が付せられる者」との表題が掲げられた学説彙集第三卷2章では、勇者や闘技者を破廉恥者の中には加えないとするウルピアーヌスの学説（告示注解第六卷）が付されているが、ビュデはこれに注釈を加えるかたちで、古代ギリシャ・ローマ期に行われていた体育競技や格闘技、大道芸、遊戯の種目を数ページにわたって挙げながら、当時の勇者や闘技者が名誉ある職業であったことを示している<sup>14)</sup>。また、「用益権」（ususfructus）を規定した学説彙集第七卷1章の注解においても、「苗木の果実はその樹木の〔所有者ではなく〕用益者に帰属する」と規定するウルピアーヌスの法文（サビーヌス注解第十七卷）を補足すべく、「苗木」（seminarium）の語源を解説したうえで、古代ローマ期に用いらた樹木栽培の技術を紹介している<sup>15)</sup>。ビュデによれば、ローマ法を解釈するには、まず文面を理解することが必要であり、そのためには法律学者であると同時に文献学者としての素養を備え、本文が書かれた言語とその時代に関

する文化・社会的背景にも精通していなければいけない。言い換えるならば、古代に関する全体的な学識を駆使し、ローマ人の生活を再現することで、ようやくローマ法が理解されうるのである。ビュデの例からも、人文主義の新たな教育理念が注釈の変容に深く関与していることが理解できよう。

## 2. 注釈あるいは古代人との対話

文献学や歴史学をはじめとする学問研究は、人文主義者たちに対して、古典作品に固有の価値をあらためて認識させた一方、古代ギリシャ・ローマ文化との歴史的断絶を強く意識させる契機でもあった。古代人との距離を発見することは、彼らを本来の姿において眺め、一人の他者として理解することにはかならない。古代作家の読書が近代人にもたらす利点について、15世紀に活躍したシエナのフランチェスコ会士、聖ベルナルディーノは次のように述べている。「さあ、彼らの書物を読んでください。どれでも、いちばん好きなものを読んでください。あなたは彼らに語りかけ、彼らはあなたに語りかけるでしょう。彼らはあなたに耳を傾け、あなたは彼らに耳を傾けるでしょう<sup>16)</sup>。」ルネサンス期の読書とは、もはや古代作家を権威ある著作家として崇め、彼らの見識に追従することではない。古代人との距離、そして類似点を同時に見据えたうえで、学芸や人間形成の導き手として彼らの作品を読むことである。この点において、ルネサンス期における古典作品の読書には、古代人との対話という側面が伴っていると言える。

読書における対話的側面はフィチーノの『饗宴注解』（1469）の中にも見られる。作品の冒頭では、フィレンツェのプラトン学派の哲学者たちが、師の復活を願うかのごとく師の誕生日に盛大な宴会を開き、プラトンの討論を再現しようとする様子が描かれている。

哲学者の父であるプラトンは81歳の時、誕生日の10月7日に催された盛大な祝宴の席に座ったまま、息を引き取った。そのため、古代のプラトン派の人々は、プラトンの誕生と死去の日を記念するものとして、毎年この祝宴を催していたのであるが、それはプロティノスやポルピュリオスの時

代に至るまで何世代も続いた。しかし、ポルピュリオスの死後1200年間、この祝宴は執り行われないうままであった。ようやく私たちの時代になって、メディチ家の名士ロレンツォが、この饗宴を復興させようと、フランチェスコ・バンディーニを接待役に任じたのだった。バンディーニは、11月7日にカレッジの館で祝宴を開くことを定め、会食者として9人のプラトン派の人々を招いた<sup>17)</sup>。

こうして9人のプラトン学派の哲学者が食事を終えてから、『饗宴』の本文が朗読されると、会食者が籤を引いて演説の順番を決め、プラトンの対話篇に解説を加えるかたちで演説を行う。フィチーノがこれほど仰々しく行う「プラトンのまねび」(imitatio Platonis)には、『饗宴』の再演出を徹底して行うことで、プラトンの思想を余すところなく理解しようとする大胆な意図が感じられる。とはいえ、注解の読者の注目を大いに引くものは、この模倣的側面ではなく、フィチーノのプラトン主義に一貫して流れるシンクレティズムである。実際、『饗宴注解』では、ヘルメス・トリスメギストス、プロティノス、ディオニュシウス・アレオパギテスなど、さまざまな古代神学者の文章が引かれており、彼らの言葉がプラトンの言葉と互いに掛け合いながら、あらゆる信仰に共通した真理を模索している。言うなれば、フィチーノは、異教思想とキリスト教思想との比較や融合を通して、プラトンとの想像的対話を試みているのである。

対話的側面は古典作品のみならず聖書注解にも見られる。エラスムスの『校訂版新約聖書』(1516)における注釈は、ギリシャ語聖書とそのラテン語訳の欄外に記されていることから、一見すると単なる文献学的注記のように思われがちだが、実は注釈者本人のコメントが随所に織り込まれているのである。たとえば、イエスがシモン・ペトロに呼びかけた「今後、あなたは人間をとる漁師になる」(ルカ福音書、第五章10節)という一節について、エラスムスは、「とる」(ζωγρεῖν)というギリシャ語動詞が「生きている」(ζῶ)と「捕える」(ἀγρεύω)の合成語であると説明した後で、敵を容赦なく虐殺するキリスト教徒の兵士について一言加えている。「今日トルコ人を攻撃して、彼らの喉を切ったり無一文にしたりする連中は、生きたままの状態というよりも死んだ状態で敵を捕えようとしている。しかも私たちが探し求めているのは、トルコ人の命

よりも彼らが持っている金銭のほうである<sup>18)</sup>。」ちなみにエラスムスは、別の聖書注解である『新約聖書パラフレーズ』（1517-1524）でも、キリストの言葉の解説を行うとともに、キリストの生活ぶりやキリスト教徒の品行に見られる格差を揶揄している。たとえば、イエスのエルサレム入場（マルコ福音書、第十一章8節）に関する注解で、エラスムスは同時代の聖職者の財産や服装を記しながら、彼らの表面的な豪華さをキリストの純真な美徳と比較してこう述べる。

彼 [=キリスト] の品位を、唯一無二の神殿に在する教皇と比較してみるがよい。この教皇はたった一年間の聖職を、不敬虔な王から恥ずべき値段で買い取ったのだ。帽子のないイエスの頭部を、金や宝石類で輝くあの教皇の三重冠と比べてみるがよい。謙虚で和やかなイエスの表情を、威嚇的な額をして眉をひそめ、高慢な目つきで自尊心に満ちた教皇の表情と比べてみるがよい。質素で庶民的なイエスの身なりを、緋色の布と金よりも値打ちの低い物は何も付いていない、あの人物の崇高な服装と比べてみるがよい<sup>19)</sup>。

聖職者や権力者への批判は、エラスムスの聖書注解にあって決して珍しいものではない。彼は、ルネサンス期の社会を風刺することで、同時代の人々がどれほどキリスト教的理想とはかけ離れた生活をしているかを読者に示唆しているのである。エラスムスにとって、キリストの生涯と教えは、ただ単に過去に起こった出来事を意味するのではない。聖書に描かれている事柄は、すでに過ぎ去った歴史的事実でありながらも、16世紀の公衆道徳を反省するのに格好な材料でもあり、近代社会が抱える問題に対して有意義な教訓を与えてくれる。聖書本文の内容がきっかけとなり時事的な話題へと展開してゆくエラスムスの注解は、言わばテキストと注釈者が時代を超えて出会い、議論を交わしあう文学空間であると表現することができよう。

### 3. 解説から脱線へ

ルネサンス期の注釈は、古典作品の解説や分析だけを目的としたものではな



い。人文主義者たちが学識の専門化に不満を感じていたことは上に述べた通りであるが、注釈はテキストの解説という口実で複数の学問分野を自由に横断できる以上、総合的な知の有機体を実現するには最も適した文芸ジャンルなのである。だが、ルネサンス期の注釈に関して、読者の注意をさらに引くのは、解説文の端々に差し挟まれる注釈者の回想や見聞などである。

そもそも、注釈 (commentaire) の語源にあたる «commentarius, -tarius» という単語は古典ラテン語で (執政官や私人の) 記録簿やメモ帳を意味していたし、ロベール・エチエンヌの『ラテン語宝典』(1531) でも «commentarius» が「私たちに关わるあらゆる事柄をあるがままの状態で簡潔に記したり、頭に浮かぶその他の事柄をそのまま、脈略もなく参考として記録したりするためのメモや日記、回想録、書物<sup>20)</sup>」と定義されているように、注釈と回想録は密接な関連性を持っている。テキストに説明を加えて解釈を下す注釈者のように、一個人の生涯をテキストに見立てたうえで、そこに生じた出来事に解説や釈明を施すこと、それこそが «commentarius» の目的であると言ってもよい。こうした回想録やメモとしての役割はルネサンス期にも踏襲され、古典作品や古代文化に関する注釈書でも、回想的な記述が平然と組み込まれることになる。そのため、作品解説の合間に、注釈者の個人的なエピソードが披露されたり、まったく別の話題が脈絡もなく挿入されたりするケースが、いくつもの注釈で見受けられる。

エチエンヌ・ドレの『ラテン語注解』(1536-38) を例に挙げてみよう。「運命」(fatum) に関する項目では、語の定義が冒頭に記されている。「ローマ人が «fatum» という語で表しているものは、ギリシャ人が «εἰμαρμένη» と呼んでいるところのもの、すなわち互いに絡みあって、ある結果を生み出す一連の事件の順序と連鎖のことである。というのも、永遠不変の真理こそが出来事の流れを決定するからである<sup>21)</sup>」。この運命の定義はキケロの文章(『予言について』第一巻55節)をそっくり引用したものであるが、ドレはこのストア主義的運命観にもとづいて、運命が偶発性によって生じるとする考えをしりぞけ、人間の出来事が目に見えない必然性に支配されていることを説く。ところがこの解説に続いて、リヨンの路上でギョーム・コンパンに襲われて自分が犯した刺殺事件を、ドレは思い起こして、以下のように語りだす。

読者よ、運命の不意打ちを惨めに受けることが、いつかは私たちにも起こるのだということをご承知ください。運命にはそのような力がない、と私はつねに思っていたのだが、わが身にも運命が現れたのだ。そして、あらゆるものの安寧や幸福にすっかり身を捧げていたこの私が、運命の命ずるがまま暴力に応戦すべく、否応なく暴力行為へと駆り立てられたのだ。これが運命の仕業だということを読者は否定するだろうか<sup>22)</sup>。

同様の脱線は「契約を交わすこと」(pacisci)の項目でも見られる。この項目を執筆している最中にドレはエラスムスの死を知ったため、キケロ論争での宿敵であった彼に対する追悼の辞を注解の間に書き記している。

エラスムスの悲報が、私がこの文章を書いているうちにリヨンで広まり、確実な情報として認められた。なぜ私はここで彼との争いを、より多くの人々に繰り返し語る必要があるのか。ただ、私が後世の人々に知ってもらいたいのは、私はしばしば生前の彼に過酷で手厳しく接しているように思われていたが、こうして彼に先立たれた以上（彼には他人に対する穏和な態度が見られなかったとはいえ）、彼に対しては公平で友情のこもった態度を取り、彼を穏和に扱いたいと望んでいることである<sup>23)</sup>。

このように、ドレは『ラテン語注解』のさまざまな項目で、あえて本筋から逸脱しながらも個人的な出来事や声明を自由に差し挟んでいる。彼の注解は、自身の学識の集大成であるだけでなく、彼の生涯に関する記録でもあり、16世紀に«commentarius」という語が指していた二つの意味（[古代文化や古典作品の]注解と[私人の]回想録）を同時に体現した作品であることが理解できよう。

ところで、ルネサンス期の注釈書の中でも、最も脱線に満ちた作品として知られるのが、ギヨーム・ビュデの『古代貨幣考』（1514）であろう。この作品はそもそも、古代ギリシャ・ローマ期の度量衡に関する研究として書かれたものであるが、テキストに織り込まれた脱線や雑談の多さゆえに、本論のみを抜粋したダイジェスト版が16世紀に出版されたほどである<sup>24)</sup>。たとえば第一巻で、

ビュデは文芸の中心地として名を馳せたイタリアに対する嫉妬心をさらけ出しながらも、ガリア人の文学的素養に感嘆するストラポンの言葉を引用して、フランス人の国民的感情を奮い立たせようとする。第四巻では、(ルイ12世の大臣であった) ジョルジュ・ダンボワーズ枢機卿の政策を批判した直後で、同時代の大法官ギ・ド・ロシュフォールの人物像を描き出して、後者の厳格さを高く評価する。作品の最後では、聖職者や宮廷人などの人物描写を100ページ近くにわたって繰り広げながら、16世紀前半の社会生活を描き出してみせる<sup>25)</sup>。もちろん、古代貨幣の解説を期待して『古代貨幣考』を手にした読者は、注解と称して延々と展開されるビュデの雑談に戸惑いを覚えることであろう。こうした論旨の逸脱(ビュデの注解作品にはきわめて顕著な特徴である)は、伝統的な注解に珍しい書き方であったため、ルネサンス期の読者の目にも突飛なものに映った。エラスムスは1516年10月28日にビュデに宛てた手紙の中で、旧知の友であるフランス・ユマニストの偉業を称えつつも、脱線を繰り返す彼の書き方に苦情を呈している。

君はとても学識豊かで、とても心地よい脱線 [παρεκβάσεις] を頻繁に繰り広げているが、それらに長々と手間を取りすぎている。比較的気難しい読者であれば、次のように自問するおそれがある。「たしかに、これらの議論は傑出しており見事ではあるが、『それはディオニュソスと何の関係があるのか』という古い表現にもあるように、それらは貨幣と何の関係があるのだろうか」と<sup>26)</sup>。

同じように、エラスムスは、翌年2月15日付の手紙でも、ビュデの注解を、食糧であふれ返るローマの浪費家ルクルの貯蔵庫にたとえながら、『学説彙集』に見られる絶え間ない脱線を批判している<sup>27)</sup>。しかしながら、このエラスムス本人も『校訂新約聖書』の注解箇所数々の逸話を挿入し、脱線を行っていることは注目に値しよう。たとえば、「フィリピ信徒への手紙」(第四章9節)に関する注解では、ラテン語写本の異文が紹介されているが、これらの写本を参照した時の思い出までもが、にわかに語られる。

私はこれを書いた時、非常に古い写本、つまり最初期の写本を参照したのだが、私の間違いでなければ、その写本にはいわゆる行間ごとの標準グロッサ [Glossa ordinaria et interlinearis] が含まれていた。この写本はブリュッセルの町から近い、アンデルレヒト学院の近隣にあるシャルトル会修道院から借りたものだったが、私は当時、健康上の理由から、そこで田舎暮らしを行っていた<sup>28)</sup>。

同様に、初代教会の時代に起こった数々の奇跡が描かれている「使徒言行録」(第五章14節)の注解で、エラスムスは、異教徒の改宗につとめる使徒たちの信仰心に敬意を表した直後に、軍事力や金銭を布教活動の手段に用いる教皇ユリウス二世を非難しているが、ここでも彼の回想は注解にあらわれる。

私自身も最初はボローニャ、それからローマで目撃したのだが、ローマ教皇ユリウス二世が、ポンペイウスやカエサルにも劣らないほどの豪華な凱旋行列を執り行った。だがこのような人物は、武力や兵力、策略や財力を用いずに、信仰のみによって世界全体を驚くべき姿に変えるこのペトロの威厳に比べると、一体何者に値するのか<sup>29)</sup>。

こうしてエラスムスは、自らの目撃証言をもとにユリウス二世の物欲と名誉欲を非難しながら、教皇庁の權威が初代教会の気高さとかけ離れていると結論づける。エラスムスもドレと同様、自らの体験をふんだんに織り交ぜながら、注解本来の機能を越えた斬新な文章を作り上げている。以上の例からも、ルネサンス期の注釈は作品解説からの逸脱を伴っており、注釈者による話題を余興として内包することで、読者を魅了しようと心がけているのである。

\* \* \*

本論では、16世紀を代表とするいくつかの注解作品を検討しながら、当時書かれた注解の特徴を示してみた。ルネサンス期の注釈は、学識豊かな人文主義者たちの教育理念を象徴するものであるが、彼らは注釈を通して古代文化の

復興を目指すだけではなく、古典作品との対話を試みることで、作品から同時代的な意義を引き出そうとしているのである。そればかりか、この時代の注釈は、作品分析や個人的な逸話を混ぜ合わせ、注釈者の言説がある程度まで許された自由な文学ジャンルでもあることが理解できる。

このように、ルネサンス期の注釈は、当時の学問体系や教育思想と連動しながら変容を遂げたのであり、そのことはまた、人文主義の運動とともに、著者と読者との関係が変化しつつあったことも示唆している。古典作品の読書が古代人との対等な交流を意味していたこの時代において、注釈者の果たす役割は単なるテキストの解説や補足にとどまらない。ルネサンス期の注釈者たちは、古典作品のよき理解者であり、同時に作品の合作者となることも夢見ていたのだ。彼らは、あたかも古典作品を「プレテキスト」として新たな「テキスト」を執筆するかのよう、注解の中で自分たちの主張を自由に書き記していたのである。

#### — 註 —

- 1) « Il y a plus affaire à interpreter les interpretations qu'à interpreter les choses, et plus de livres sur les livres que sur autre subject : nous ne faisons que nous entregloser. Tout fourmille de commentaires ; d'auteurs, il en est grand cherté. Le principal et plus fameux sçavoir de nos siecles, est-ce pas sçavoir entendre les sçavans ? Est-ce pas la fin commune et demiere de tous estudes ? » (Montaigne, *Essais*, éd. Villey-Saulnier, Paris, P.U.F., 1965, p. 1069).
- 2) Jean Céard, « Les transformations du genre du commentaire à la Renaissance », in *L'Automne de la Renaissance, 1580–1630*, Paris, Vrin, 1981, pp. 101–115 ; « Les mots et les choses : le commentaire de la Renaissance », in *L'Europe de la Renaissance. Cultures et civilisations* (Mélanges Marie-Thérèse Jones-Davies), Paris, Jean Touzot, 1988, pp. 23–36 ; « Les formes du commentaire » in *Précis de littérature française du XVI<sup>e</sup> siècle*, sous la direction de Robert Aulotte, Paris, P.U.F., 1991, pp. 177–191.
- 3) ヘレニズム・ローマ期における注解については、H. I. マルルー『古代教育文化史』（横尾壮英はか訳）、岩波書店、1985、pp. 204–206, 336–338.
- 4) この三段階の読解法については、ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編『読むことの歴史』（田村毅はか訳）、大修館書店、2000、p. 147；ピエール・リシェ『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』（岩村清太訳）、知泉書館、2002、pp. 255–256.
- 5) 中世における聖書注解の規則とその適用については、Henri de Lubac, *L'exégèse médiévale. Les quatre sens de l'Écriture*, Paris, Aubier-Montaigne, 1959. トマス・アクィナスの『神学大全』（第一部第一問題第10項）によれば、歴史的（*historicus*）意味は文字通りの意味を表しており、寓意的（*allegoricus*）意味は信仰が向かうべき対象を、道徳的（*moralis*）意味は行うべき事柄を、天上的（*anagogicus*）意味は人間が終末に向かう場所を示している。

- 6) ウェルギリウスの作品をはじめとする、中世に行われた異教文学・思想のキリスト教的解釈については、エウジェニオ・ガレン『ルネサンスの教育』（近藤恒一訳）、知泉書館、2002、pp. 68-72；L. D. レイノルズ、N. G. ウィルソン『古典の継承者たち——ギリシャ・ラテン語テキストの伝承にみる文化史』（西村賀子ほか訳）、国文社、1996、pp. 172 et 399；ピエール・リシェ、前掲書、p. 258.
- 7) « Ne ipsa quidem opinor : disciplinarum omnium regina theologia : ducet indignum admoeri sibi manus : ac debitum exhiberi obsequium : a pedissequa grammatica : quae tametsi nonnullis est dignitate posterior : nullis certe opera magis necessaria. In minimis versatur : sed sine quibus nemo evasit maximus » (Erasmе, *Les Préfaces au « Novum Testamentum »*, éd. Yves Delègue, Genève, Labor et Fides, p. 216). エラスムスによるヴァラの評価については、木ノ協悦郎『エラスムス研究—新約聖書パラフレーズの形成と展開』、日本基督教教団出版局、1992、pp. 71-77を参照。
- 8) Cf. Erasmе, *Ibid.*, p. 104 (『エラスムス』、宗教改革著作集2、教文館、1989、p. 231).
- 9) 古代ギリシャ期の「一般基礎教養」については、H. -I. マルー『古代教育文化史』（横尾壮英ほか訳）、岩波書店、1985、pp. 215-217；『アウグスティヌスと古代教養の終焉』（岩村清太訳）、知泉書館、2008、pp. 171-188.
- 10) « [orbicularis doctrina] omneis numeros professionis complexa, omnium scientiarum elementa rationesque commentans » (Guillaume Budé, *La philologie* [*De philologia*], Sherbrooke, Editions de l'Université de Sherbrooke, 1989, p. 54).
- 11) « Tales ferme Hercules sunt, Princeps illustrissime, atque praestantissime, aut Heraclidae certe hodie, ejus philosophiae alumni quam antiqui graeci eruditionem circularem appellaverunt : quaeque ingentem non solum ambitum amplectitur, quasque restim quandam chororumque disciplinarum, sed etiam anfractus viae arduos aegreque superabiles. Nostro vero saeculo sudore quam olim majore permeabiles, quod tamen ipsum saeculum Musarum choros edere coepit strenue, togatos una et palliatos, ex nominatissimis quondam jugis illis repetitos ac reduces, qui jam inaccessi videbantur atque deserti » (Budé, *De studio literarum recte et commode instituendo*, Paris, J. Bade, 1532, ff<sup>os</sup> IV v<sup>o</sup>-V r<sup>o</sup>).
- 12) フランソワ・ラブレ『パンタグリユエル物語』第五章。この章に関しては、マイケル・A・スクリーチ『ラブレ 笑いと叡智のルネサンス』（平野隆文訳）、岩波書店、2009、pp. 173-178を参照。
- 13) この点については、Louis Delaruelle, *Guillaume Budé : Les origines, les débuts, les idées maitresses*, Genève, Slatkine Reprints, 1970, pp. 103-113を参照。
- 14) Guillaume Budé, *Annotationes [...] in quatuor et viginti Pandectarum libros, ad Ioannem Deganaum Cancellarium Franciae*, Paris, Robert Estienne, 1542, pp. 174-184. なお、『学説彙集』の法文にあたっては、H. Hulot et J.-F. Berthelot (éd. et trad.), *Les cinquante livres du Digeste, ou, Des Pandectes de l'Empereur Justinien*, Paris, Rondonneau, 1803-05 (7 tomes) を参照した。
- 15) Budé, *Ibid.*, pp. 207-209.
- 16) エウジェニオ・ガレン、前掲書、p. 94より引用。
- 17) « Platon pere des Philosophes, aagé d'Octante et ung ans, estant assis en ung banquet, les viandes levées, le septiesme de Novembre, onquel jour avoit esté né, rendit l'esprit. Or remettoient sus, tous les ans ce banquet les anciens Platoniques, auquel estoient festoyés le jour de la nativité et anniversaire de Platon, jusques aux temps de Plotin, et Porphyre. Et apres Porphyre mille deux cents ans a laissé estre observé ce banquet. Lequel à la parfin, de nostre temps ung homme bien renommé, et excellent Laurent de Medicis, voulant renouveler ce, ordonna pour icelluy, maistre d'hostel François de Bande : qui ayant deliberé solennizer ce jour le septiesme de Novembre, en appareil

royal, receut neuf Platoniciens conviés au banquet [...] » (J. de la Haye [trad.], *Le commentaire de Marsille Ficin, Florentin : sur le Banquet d'Amour de Platon (1546)*, éd. établie par Stephen Murphy, Paris, Champion, 2004, p. 43).

- 18) « Nunc qui Turcas invadunt, ut illos jugulent ac spolient, mortuos capere malunt, quam vivos. Imo pecunias Turcarum venamur potius quam Turcas ipsos » (Erasme, *Annotationes in Novum Testamentum*, dans *Desiderii Erasmi Roterodami Opera omnia*, Jean Leclerc [ed.], Leiden, 1703–06 [以下, LB と略記する], tomus VI, 250F).
- 19) « Cum hujus dignitate compone unius Templi Pontificem, qui sacerdotium unius anni ab impio Rege turpi pretio redemerit. Confer nudum Jesu caput, cum hujus auro gemmisque lucente tiara. Confer modestum illum et mansuetum Jesu vultum, cum hujus facie fastu turgida, fronte torva, superciliis adductis, oculis elatis, ore procaci [...]. Confer Jesu simplicem ac plebejam vestem, cum hujus ornatu tragico, in quo nihil vilius purpura et auro » (Erasme, *Paraphrasis in Novum Testamentum*, LB, tomus VII, 243E).
- 20) « Ung registre, ung journal, ung memorial, ung livre où nous escripvons tous nos affaires en brief, comme mises et receptes, et autres choses qui nous surviennent, pour memoire, tout ainsi comme elles viennent, sans autre ordre » (Robert Estienne, *Dictionarium, seu Latinae linguae thesaurus*, Paris, 1531, tomus I, f. 121 v<sup>o</sup>, article sur le “Commentarius”).
- 21) « FATUM id appellant Latini, quod Graeci εἰμαρμένην : id est, ordinem, seriemque, causarum, cum causa causae nexa rem ex se signat. Ea est ex omni aeternitate fluens, veritas sempiterna » (Etienne Dolet, *Commentariorum Linguae Latinae Tomus Secundus*, Lyon, Sébastien Gryphe, 1538, col. 1106, article sur “fatum”).
- 22) « Tu vero, ante quam ad hujus vocis exempla descendam, fato nos aliquando etiam misere afflictatos scito. Fati vim nullam esse semper credideram, cum esse tibi, supra caput mihi fatum est, quique totus omnium et salutis, et utilitati studebam, fataliter ad vim inferendam vi coactus impellor. Id tu fato factum negabis ? » (*Ibid.*, col. 1107).
- 23) « de cujus [Erasmi Roterodami] obitu, cum haec scriberem, dissipatus est Lugduni rumor, et plane confirmatus. Meam cum illo contentionem quid hic pluribus repetam ? Mortuo (qua tamen modestia in alios non usus est) tam me aequum, et amicum noscet posteritas, quam in vivum asper, et durus visus sum plerisque » (*Ibid.*, col. 151, article sur “pacisci”).
- 24) 『古代貨幣考』のダイジェスト版は1522年に出版された (Voir Guillaume Budé, *Épître du livre De Asse*, Paris, M.-M. de La Garanderie et L.-A. Sanchi [éd.], Les Belles Lettres, 2008)。『古代貨幣考』の脱線をめぐる研究としては, Marie-Madeleine de la Garanderie, « L'harmonie secrète du *De Asse* de Guillaume Budé », in *Bulletin de l'Association de Guillaume Budé*, n° 4, 1968, pp. 473–486を参照。
- 25) Guillaume Budé, *De Asse et partibus ejus*, Lyon, Sébastien Gryphe, 1542, pp. 50–95 (イタリアとフランスの文芸, ストラボンの考察は pp. 84–85), p. 430–468 (ギ・ド・ロシュフォールの人物描写), pp. 698–785 (注解の結末部分)。
- 26) « Ad haec, dum in παρεχβάσεις eruditissimas simul et amoenissimas crebrius expatiaris et in his longule commemoraris, periculum fortassis est ne quis morosior ita secum cogitet : Praeclara quidem haec et splendida, sed ut olim τί ταῦτα πρὸς τὸν Διόνυσον, ita quid ista Assem ? » (Erasme, *Opus epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, P.S. Allen [ed.], Oxford, Clarendon, 1909, tome II, n° 480, p. 369).
- 27) Erasme, *Ibid.*, tome II, n° 531, p. 467.
- 28) « Cum haec scriberem, consului pervetustae, imo primae, ni fallor, Editionis codicem, qui Glossam habet adjunctam ordinariam et interlinearem, ut vocant, praebitam e monasterio Cartusiensium, quod

propinquum est urbi Bruxellensi, vicinum collegio Anderlacensi, in quo tum temporis valetudinis causa rusticabamur » (Erasme, *Annotationes in Novum Testamentum*, LB, tomus VI, 877 D).

- 29) « Ipse spectavi primum Boloriae, deinde Romae, Julium Pontificem Romanum, ejus nominis secundum, splendidissimos agentem triumphos, ac prorsus tales, ut cum Pompejanis aut Caesarianis triumphis conferri possent. Verum quid illi haec ad hanc Petri majestatem, non armis, non copiis, non machinis, non auro, sed sola fide totum orbem in sui miraculum convertentis ? » (*Ibid.*, LB, tomus VI, 455F).